

米国の清教徒主義が韓国の近代教育と余暇に与えた影響

The Influence of Puritanism on Modern Education and Leisure in Korea

金 玉泰 KIM, Oktae

● 西原大学校
Seowon University



米国キリスト教, 宣教師, 清教徒思想, 教育と余暇

American Christianity, missionary, Puritans' thought, education and leisure

ABSTRACT

米国の清教徒主義が韓国の近代教育と余暇に与えた影響に対して考察した本稿の結果は次のようである。(1) 清教徒たちは、教育を魂の救いの手段と捉えて重視した。(2) 清教徒思想が韓国の近代教育に与えた影響は、キリスト教の精神とともに古い儒教的な旧習を改革し、韓国民族に自主・自立の精神を確立するようにして、立派な民族の指導者を輩出したのである。(3) 清教徒の余暇観は、安息日遵守主義とストイックな性格、合法的な基準にともなう余暇追求、余暇に対する功利的な態度など、否定的な姿が多かったが、Y.M.C.Aの結成で良い兆しが現れることになった。(4) 清教徒思想が韓国の余暇に与えた影響は、ストイックな安息日遵守主義、労働のための余暇意識などは否定的であるが、近代体育とスポーツの導入、体育活動を通じた民族の団結などは、肯定的に評価することができる。

This paper examines American Puritans' thought about education and leisure in modern Korea by means of a Literature Review. The results are as follows: first, Puritans regarded education as a means to cure souls and as a very important aspect of life. Second, the effects of Puritanism on the education system of modern Korea have caused a reform of Confucian conventionality. This new belief in Christianity, influenced by Puritanism, has created a sense of independence for most Koreans. The effects of Puritanism have also produced great national leaders. Third, the Puritans' view of leisure, in other words, Sabbatarianism and asceticism, and the pursuit of pleasure by lawful standards and utilitarian attitudes were generally negative. However they became accepted and encouraged by the organization known as YMCA. Fourth, the effects of Puritan beliefs on leisure in modern Korea —ascetic Sabbatarianism and the sense of leisure as work — were negative. However,

the introduction of modern sports and physical education, and the solidarity of the people through physical education are all positively regarded by the Korean people.

1. はじめに

米国キリスト教が韓国に入ってきたのは、日本より幾らか遅れるが大きな差はない。しかし、今日両者の間には大きな差が現れている。韓国には、開化派人士や政界の要人と知識人たちの間だけでなく、一般民衆にも浸透して一大勢力となった。しかし、日本には初めから政界とは関係がなく、一般大衆にも受け入れられなかった。なんとか、インテリ中産階級にだけ浸透し、少数派を形成するに至ったのである。

このような違いを作り出した重要な条件を、両国におけるナショナリズムの状況の違いからみてみたい。日本の大木英夫(1969: 342-343; Bae, 1983)は、「日本キリスト教は、ナショナリズムと結合できず、常に対立関係にあったのが事実だ」と述べている。しかし、韓国においては、西勢東漸、または開化と独立を求めるナショナリズムは、キリスト教とはいかなる矛盾も作らず、かえって積極的に結合することができた。

実は、韓国が西洋諸国との間に初めて、1882年、米国と修好通商条約を締結した後、公的な韓米関係の創始期(1882-1910)は、今日のように政治・経済・外交・安保的な側面よりは、かえって、宗教と教育面でより大きな意味を探ることができた。

なぜなら、韓国が門戸を開放した時、日本や清国は、政治・経済面の進出を試みたが、米国はキリスト教宣教師を一番最初に派遣し、彼ら宣教師たちは、韓国社会の諸条件を考慮して、布教に先立ち医療と教育部門を通じて彼らの使命を成し遂げようとしたのである。例えば、彼らは教会より学校を先にたてて、『教会のそばに学校』を主張したカルバンやノックスとは違って、学校と病院を先にたてて、そのそばに教会をたてたのである。その後、米国キリスト教は、韓国に西洋の学問と知識などを伝播するのに大きく貢献した。そして、

米国キリスト教は、韓国キリスト教の主流をなすことになり、教育をはじめとする国民の意識と生活に大きく影響を与えることになった。

このような米国キリスト教が与えた影響に対して、韓米両国の学者たちの間では、小教ではあるが数編の報告が出てきたことがある。例えば、1983年 Baeは世界史的観点で、1884年から1910年韓国併合まで、米国キリスト教の布教活動を教育と医療事業を通じて考察し、教育と医療事業に尽くした貢献とその成功要因を、特に、キリスト教の清教徒伝統に基因することを確認し、清教徒主義における教育と学問、そしてそこで付与された知識が如何なるものであったのかについて考察を行い、韓米関係の創始期において米国キリスト教の活動が韓国近代社会と教育に与えた影響について明らかにしている。

彼によると、韓国近代史で、また初期の韓米関係史で、米国キリスト教と彼ら宣教師たちが尽くした貢献は、実に多大であった。米国キリスト教の宣教師たちは、たいてい17世紀、米国のニューイングランド清教徒の後裔として、聖書至上主義と敬虔主義に立って、韓国キリスト教の主導勢力になったのである。たとえ、彼らが国家と教会の分離という純粹信仰主義のために、韓国人の民族教会の成長を阻害しようとも、世俗的な民族主義を拒否し、今日まで、純粹な信仰としての韓国教会が出て行く道を提示してくれた。

特に、彼らが韓国に寄与した分野中で、医療事業と教育事業に対する彼らの貢献は、真に大きいと言えよう。また彼らは、韓国キリスト教宣教師史の序章を飾っただけでなく、韓国の近代教育と医学史を飾った。もちろん、最初の近代学校は、韓国人によって立てられたが、実際の洋式の近代学校は、米国の宣教師たちによって発展したのである。近代教育に対する理解が全般的に不足した荒れ地のような国に、近代教育と西洋の文物と知識を伝播するのに、彼らより偉大な功労者はない。

結局、今日、韓国の教育や学問水準をこの程度に引き上げるには、米国キリスト教の功労が大きいといわざるをえない。しかし、韓国に入ってきた米国のキリスト教がいかなる性格を持った宗教なのか、特に、清教徒ないし清教徒的な性格と伝統を持った宗教という点に対しては、理解されてなかったり不足しているのが実情である。そのため、本稿では、清教徒主義の中心思想を分析して、清教徒的な米国のキリスト教が、韓国の教育と余暇に与えた影響について、関連文献など資料を通じて究明してみようと思う。

2. 米国清教徒の中心思想

清教徒思想、すなわち、ピューリタニズム (Puritanism) とは何か。清教徒の歴史と思想を説明するのは簡単ではないが、その概要を見れば、ピューリタニズムは、16世紀、英国で始まって、17世紀、米国のニューイングランド植民地まで拡大したキリスト教の一つの信仰形態といえる。政治、形式、そしてより小さい範囲において、教理の問題に対して英国国教会に異議を提起し、ローマカトリック式の慣行を捨てて会衆の自治権と権威を行使し、究極的な権威としての聖書に基づいて、自分たちの社会を建設しようと望んだ人々によって構成された改革主義信仰運動である。彼らの見解は、おおむね、当時の英国国教徒たちとは比べることができない情熱を持っていた。米国の清教徒たちが、たとえ、新世界での彼ら自身の方式においては英国教会と差があっても、公式的に、または、原則的には自分たちを英国教会と分離しないで、その代わりに英国教会を浄化することを望んだ。また重要なことは、清教徒主義がその核心においては、信仰運動であった反面、英国と米国皆の社会・政治・文化の多くの面に影響を及ぼしたという事実を認めることである (Park 訳, 1994: 8)。

ハーバード大学の Morison (1935: 4; Bae, 1983) によると、17世紀、米国の清教徒たちは人文主義者たちであった。ルネサンスと合わせて、宗教改革と中世キリスト教の相続人でもある。清教徒

たちは、彼らの文化で文芸復興時代の人文主義者の伝統を、ある側面では他の英国植民地の非清教徒植民地開拓者たちよりはるかにたくさん持っていた。清教徒たちは、宗教改革の影響を受けて教育に対する熱意と学問に対する愛着を持った。このような態度は、マサチューセッツで荒漠な逆境の密林を除去しながら、初等教育と初等中学校 (Grammar School)、そして大学を設立することに反映されたのである。清教徒たちは、悪しき環境的要因と知的で疎外されて、経済的に貧しい少数の人口にもかかわらず、彼らの教育制度を永続させるのに成功した。

Michael (1970: 38-39) によると、清教徒たちは、威厳と凝集力を持った者たちとして、一つの思想的な共同体 (A Thinking Community) であった。これら17世紀ニューイングランドの人々は、契約思想 (The Idea of Covenant) をたくさん作った。この契約思想によって、彼らは人間と神の関係を理解し、また関係を決めようとした。彼らは、カルバンのジュネーブ神政統治後の道徳的な義務問題、救援の確信、そして超越性に対して関心を持った。契約を通じて、彼らは神と時間と理性との関係を把握し、それは知識人に意味ある概念として、人間に酔した神の方法を正当化させるのを助けてくれた。また、隠された神に対する感覚を失わず、維持の法則として超越的な力を束縛し、制限する問題を契約は助けてくれた。制度的に契約を清教徒企業の目的と手段と糾明した。また、契約は聖書共同体 (The Bible Common Wealth) を補完してくれた。契約は、『目に見える聖徒たち (Visible Saints)』が政権を掌握するための努力を許諾してくれた。これら目に見える聖徒は、たとえ、少数であるのに教会と国家の権力を掌握した人たちであった。

一方、清教徒たちは聖書の人々であった。彼らに聖書は生きている本であり、人の行動と運命に独特で強大な影響力を及ぼす本であった。特に、彼らは聖書と静的に向き合ったのではなく、動的に向き合ったので、聖書有能力を徹頭徹尾信奉し、政治、社会、経済などの全ての根源を聖書から見つけ出したのであった。教会と社会がみな神の御

言葉によって治められ、運営しなければならないと感じた。窮極的に清教徒たちは、経済、政府、家庭、教会、人生、性、自然、教育、そしてその他のすべての問題に聖書本文と聖書の模範を工面した。清教徒たちは、彼らの理論だけでなく彼らの具体的な生を見る時、彼らが聖書を生の前提のための規準としたことが明らかである。

また、清教徒たちは、個人主義の隆盛に寄与したとされる。このような個人主義の神学的な根拠は、すべての信者が祭司長という教理である。この個人主義は、文芸復興で話す人本主義的な個人主義ではない。すべての人を神の前で同等に接し、すべての個人の尊厳を保護しようとする、清教徒たちの均衡を成し遂げる努力のなかにもこのような個人主義が発見される。清教徒たちは政府や制度的な次元でなく、主に自発的で個人的な次元で社会活動を行った。清教徒たちは共同体を強調したが、一方では、個人の自由と尊厳に関心を傾けることによって均衡を保とうとした。彼らは、出生や地位を前面に出した特権層で覚醒を促し平等を叫んだ。彼らは、また、統治を受ける人の合意があってこそ統治することができるという理論を作っただけでなく、それを現実に移した (Kim 訳, 2003 : 367)。

清教徒たちは、ほとんど皆がカルバン主義者であった。カルバン主義の最も明確な神学思想の一つが神の主権思想である。神がこの世界と宇宙の森羅万象と人間と動植物を彼の絶対主権下に治めるという事実である。したがって、人間は神だけを畏敬し、その方の意について、その方に光栄を捧げる生涯を生きなければならないのである。神だけに光栄を上げるので、世の中統治権者や法律や制度や慣習も神に光栄を捧げることができない場合、変わったり変化しなければならない。多様な清教徒信仰、分派主義過激派の登場など、清教徒に対する社会的な非難事項もありえないことではないが、全般的な清教徒信仰は、脱過去、脱権威主義的であったのを否認しない。このような清教徒の崇高な気概が、ニューイングランドでも持続的に展開し、現代アメリカ人の意識深く内在して、彼らの社会文化形成の根幹をなしたことを当然だ

と見ることができる (Kim, 1999)。

米国清教徒思想研究の第一人者の Miller (1961: 365-491) は、清教徒神学の核の契約神学を分析しながら清教徒の教育観・学問観をよく説明している。彼によると、清教徒たちは、神を神秘的な存在と説明しているカルバンとは違って、神の秘密の方向が分かると信じた。なぜなら、神は自然的な方法以外には人間に作用しないためである。また、契約による神のすべての戒は、明白な理性に根拠を置いているから、神は、これらに『救援か捨てるといふことか』という言明に対して明確な理由を発見できるようにしたのである。神は万物の支配者であるから、自然を通じて作用する。したがって、契約神学では、知識・論理学・数学が必要である。知識それ自体が絶対的信仰のためには十分なものではないが、信仰は知識を必要とするから、知識を軽べつすることはできない。学問は太陽の下にあるすべての無駄なものなかでは最良のものなのである。学問と信仰は、補助を共にしなければならない。それで世俗的な学問、すなわち、科学・歴史・修辞法・自然に関する知識は、全部これら清教徒たちにとっては二重の意味をもった。知識は有益なことであるだけでなく、それは神学の一部であるためである。

このような契約神学を信じる清教徒たちは、教育を重要視しないわけにはいかなかった。実は、彼らにとって無知は、信仰の源泉でなく異端の源泉であった。神の御言葉を正しく理解するには、知識や学問が必要だという清教徒たちの信念を証明する事実はたくさんある。その例として、清教徒の牧師たちの教育水準が非常に高かったという事実である。1640年以前にニューイングランド地方に定着したケンブリッジとオックスフォード卒業生の数は100人を越えたが、その大部分が牧師であった。しかし、英国国教徒が建設したバージニアには、その程度の教育水準を主張するほどの人が5人にもならなかった (Bae, 1983)。

結局、米国清教徒主義は、ニューイングランドの最初に定着した人たちによって移された観点、価値、綱領、そして規範のなかに見出される。また、清教徒たちは彼らの根本的な信念において、

すべてのヨーロッパのプロテスタントのひとつか、少なくとも、カルバン主義のプロテスタントと同じようなものであった。フェリー (R. B. Perry) は、ピューリタニズムをカルピニズムと同一視して、フランスのユグノー、スコットランドの長老教、オランダの改革教会も清教徒と含ませた。シンプソン (A. Simpson) とアルストロムは、クエーカー教徒も清教徒と見なした。そして、マードック (K. Murdock) は、プリマスの分離主義者たちとマサチューセッツの独立会衆主義者と浸礼教徒とシーク教徒も清教徒と見なした。

しかし、一般的に清教徒といえば、長老教徒と会衆主義者 (Congregationalists) と浸礼教徒 (Baptist) を主に含んでいる。したがって、韓国のキリスト教の主導的な勢力の長老教は、まさに清教徒ということが分かる。ニューイングランド歴史上重要な役割を果たした会衆主義教会は、韓国に伝播しなかったけれど、長老教が米国で会衆主義教会とともに二大教会の一つであり、明らかに清教徒に間違いがない。そして、韓国に入ってきて長老教と双壁を成し遂げた米国の監理教 (メソジスト) は、誰も清教徒と話さないが、彼らも清教徒化されたキリスト教であった。監理教は、18世紀中葉、英国のウェズリー (John Wesley, 1703-1791) が創設したキリスト教だが、1771年、アスブリ (Francis Asbury) により初めて米国に伝播し、その後、米国清教徒の影響を受けて次第にそれと似たパターンを持つことになった。それで、一時監理教会は、会衆主義者たちと統合しようとするこゝろさえたのである。

3. 清教徒思想と韓国の近代教育

清教徒たちの聖書理解とその理解により生きようと思う彼らの試みは、彼らが教育に置いた重要性と彼らが文化的に自分たちを表現した方法に影響を及ぼした。さらに、これらは旧韓末近代韓国の教育に大きな影響を与えた。

3. 1 清教徒の教育観

清教徒たちは教育をきわめて重要だと考えた。

魂を救いに引き渡しできる信仰知識の手段であると考えたのである。清教徒たちは、人生を世俗的なことと神聖なことに区分するのを拒否したので、学問探求がある程度可能であった。彼らの視角で見る時、すべての人生と学問は探究する価値があった。真の知識は神様の創造物だから、一致と意味を持っていた。清教徒の教育的関心の目録中一番上にあるのは、読み取り教育であった。聖書を読む能力は、社会全体の向上のためだけでなく、魂の救いのためにも最も望まれるものであった。

清教徒の視角から見る時、人間の仇敵は無知、特に神様の記録された御言葉に対する無知であった。聖書の内容に対して故意に多くの人を暗黒の中に置いたことに対して、特別にローマカトリック教会が非難された。カートン・メイザーは、「無知は (信実な信仰の母でなく) 異端の母だ」と主張した (Park 訳, 1994 : 261-262)。清教徒たちは、無知を聖徒に対するサタンの最も大きな攻撃手段だと見た。サタンは『人々を聖書の知識から遠く離れているようにさせて』無知と迷信に引き渡し、神の御心に敵対するものとして、敵キリストの王国を拡張させる。このようなサタンの攻略から子供を保護するためには、教育が必要だったので、1580年、英国のデダム (Dedham) 老会¹⁾ は、すべての若者に英語を教えることを決議し、1642年マサチューセッツ州政府は、『子供がキリスト教の根本教理とこの国の重要な法を読んで理解できるように』家長は文を教えなければならないとした。1647年には、50家庭がある町内には、小学校 (Reading School) をたて、100家庭を越える村には中等学校 (Grammar School) をたてるようにするなど教育計画を具体化した。1648年には、家長の教育的義務を強化して、家長は毎週一回以上子供と僕たちに、重要な教理の問答を通じてキリスト教の根本教理を教えなければならないとしていた (Hall, 1989: 34)。

米国における植民地化直後、どんな英語圏の植民主義者なども高等教育機関を設けなかった。しかし、清教徒たちは違った。マサチューセッツ湾に到着して6年ぶりに、評議会は『学校または大

学設立』のために、400ポンド積み立て法を通過させた。このようにして設立されたハーバード大学は、部分的には農夫たちの犠牲を通じて注目するほど早く席を占めることになった。これらの農夫たちは、教師たちと学生たちを後援するために小麦を喜捨した。

米国の清教徒歴史を見せる有名な文献の『ニューイングランドの初めての収穫 (New England's First Fruits, 1643)』を見れば、ハーバード大学が設立されるまで、どんな努力があったかをよく知ることが出来る。そこには、「神様の助けられることでニューイングランドに無事に到着した以後、私たちは家をたて、暮らす仕事を用意し、良い礼拝居所を用意して市民政府を樹立した。もう私たちが願って追求するのは教育を發展させて、それを子孫に安定的に供給することだ」と記録している (Kim 訳, 2003: 314-315)。

学校の設立は、米国清教徒たちの象徴のようになった。かつて、ジョン・エリオットは、ボストンで開かれた老会でこのように祈った。「神様、私どもに学校をたくさん許諾して下さい。この総会に属したすべてが各自の村に帰って、良い学校をたてるようにして、彼らが属した村が活気を現すようにして下さい」1647年公布されたマサチューセッツ州のある法案は、学校の設立を命令していて、コネチカット州は3年後に同じ命令を下した。1655年に発表されたニューヘブレン条例 (New Haven Code) は、すべての両親と事業主たちに、子供たちと徒弟たちに教育を提供しろと命令している (Jung, 2006)。

清教徒たちは、宗教的な理由に付け加えて世俗的な理由でも教育を後援した。清教徒の教育革新は、適切な米国の大衆教育制度の模範になった。その中で、高等教育は清教徒の影響が絶対的であった。清教徒たちがハーバードを創設した先例により数多くの大学が立てられた。このような傾向は、19世紀に至っても続いただけでなく、ある程度現在でも追従されているのが実情である。

Bae (1983) によると、清教徒の伝統を持った宗教が推進力があり多様であったために、多くの大学をたてることができた。教育は有益だけでない

く、望ましいというアメリカ的な信念は、早くからこのように清教徒の伝統から始まったのである。このような米国の教育風土で、教育を受けた米国キリスト教宣教師たちが、韓国にきて、教育に貢献したことは一つも変なことでない。特に、彼らは世界のすべての国のモデルユートピアとして模範になり、また、世界のすべての国に彼らの宗教的な理想を植えつけてくれようとしたのである。ただし、それを受ける準備ができていたかが問題であるだけであった。

韓国で、この米国キリスト教が大きな成果を上げることになった理由は、まさに韓国が西洋諸国に門戸を開放した後、米国キリスト教の宣教師たちに医療事業、教育事業に門をぱっと開いておき、米国教会の教育と医療事業に対する高い関心と支援を、そのまま受け入れる準備態勢を整えていたためであろう。米国宣教師たちが韓国で医療事業と教育事業に積極的であったことは、魂を救済し、無知で韓国人を解放させて、实际的に韓国人を助けようとする純粋な宗教的な動機から始まった。

3.2 清教徒思想が韓国の近代教育に与えた影響

19世紀末の韓国では、開港と共に門戸開放が始まりながら、教育にも近代教育思潮に立った新教育実施が要請された。この時に、キリスト教が韓国の教育をはじめとする各分野の近代化に及ぼした影響は、多大であり、宣教師たちによって、独自に、あるいは政府を助けながら布教・教育・医療事業を展開した。これらキリスト教の宣教師たちによって設立された学校は、韓国の近代学校の成立のための先駆的役割を果たした。韓国で米国によるキリスト教の布教活動の成功は、量的側面から明らかである。1893年から1983年まで100年の間、韓国で活動した宣教師は1,952人で、その中約1,710人が米国人であり、その中637人が解放前に韓国に入国している。

1910年の統監府統計によると、当時キリスト教系の学校は全796校に達するのに、これは1910年5月現在の学部認可を受けた学校数が2,250校であった事実との比較から、キリスト教系学校の影響力と韓国の近代教育の発達史で占める意味を察

することができる。学生数においては、政府が運営する普通学校の学生数よりさらに多かったという (Lee, 2007: 26)。

今日、韓国の近代学校の元祖だと言える広恵院 (カンヘウォン) と培材 (ベジェ) 学堂、そして女学校のゆりかごになった梨花 (イファ) 学堂など、みなが宣教師の手で創設されたのである。これは、キリスト教教会の開拓者のカルバン (J. Calvin) やノックス (J. Knox) の『教会のそばに学校』という言葉は、韓国の場合、『学校のそばに教会』という言葉に代わられた。もちろん、これらの学校は、1894年、韓国政府による教育改革がある時まで、新文化・新教育輸入の先導的な役割を果たした (Son, 1989: 1254)。

キリスト教系の学校、すなわち、ミッションスクールの設立精神は、キリスト教の精神を広く伝えることによってとなりの社会のために、西洋の文物と思想を紹介・伝達して古い儒教的な旧習を改革し、進んで民主的な新しい社会を作ると同時に、韓国民族に自主・自立する精神的姿勢を確立することを目的としていた。この理念により宣教師たちは、ミッションスクールを通じて西欧的教育制度と新文学を紹介することに開拓者的な任務を果たしただけでなく、また、民主主義を教えることも行なった。そして、彼らが紹介した新学問と民主主義の影響は、だんだん民間の間で高まって、開化思想の要素になり、これがついに民族主義の成長とその理念を形成するに至ることになったのである。そして、韓国が国権喪失で苦悩していた時、これらのミッションスクールは教育救国運動の主役を担当することになった (Son, 1998: 241-242)。

初期の宣教師たちが韓国に植え付けた文化的寄与度を整理してみれば、次のようである (Won, 1974: 190-191; Jang, 2003: 224)。①韓国に洋式の教育制度を初めて紹介し、新学問を輸入することに開拓者的役割を果たした。②教育と西洋人教師との接触を通じて、西洋人の文物と思想と考え方をこの国に紹介・伝達した。③階級を打破し、女性の地位を向上させた。各学校は、両班 (ヤンバン)²⁾ や庶民の子弟を差別なしに受けて教育させ、貧富

の差を分けないで、受け入れることによって教育の機会均等を実践した。④学生たちに勤労の精神と自立精神を教えた。⑤正規科目の他に演説会、討論会、運動会のような特別活動を奨励することによって、近代的教育を展開した。

また、Lee (1949: 22-44; Bac, 1983) は、キリスト教が韓国教育に与えた影響を「国の教育が大衆的なことにならないこの国に、大衆を相手にしたキリスト教は、大衆の過去の夢を起こすのに大きく貢献した」として、その影響を次の通り要約している。①信仰に基礎を置いた生活を浄化した。すなわち、酒と賭博を禁じ、ふしだらな迷信的な行為をなくした。②思想を向上させた。すなわち、頑固な儒教思想の修正、両班と常民 (あるいは良民) の階級観念打破、男女同等観の鼓吹、一夫一妻主義を鼓吹させて、子供の教育を向上させた。③生活習俗を直した。すなわち、礼儀の足かせから抜け出して、冠婚葬祭を簡便・荘重にし、集いと娯楽を自由にした。④知識が増えた。すなわち、無知から抜け出そうとする考えを強くし、子供の教育熱を高め、演説・討論会など共同集會に参加させ、食べ物・衣服・園芸などの見聞を広げ、新しい音楽を普及させ、新しい医薬を普及・善用させた。⑤民族意識を培養した。すなわち、韓国語を普及させ、教会を通じて外国に対する常識を高め、宣教師を通じて朝鮮の民族運動を海外に宣伝する機会を提供した。

一方、Fisher (1970: 96) は、宣教教育の社会的寄与を次の通り数え上げた。①病人や怪我人に対する科学的治療、②貧民、孤児などに対する組織的な保護策、③迷信崇拜の減少、④子供に対する尊重、⑤早婚と婚姻の改善、⑥女性に対する態度と処遇の改善、⑦民主主義思想の普及、⑧ハングル (韓国固有の文字) の普及と一般化、⑨民主的な人間関係と階級差別の打破、⑩社会福祉に対する奉仕と新しい関心、⑪酒・麻薬などに対する啓蒙、⑫近代の科学的な学校教育に対する要請と尊重の増大。

特に、Bac (1983) は、米国キリスト教宣教師たちによる最も大きな貢献は、何よりも立派な民族の指導者たちを輩出したという事実を挙げてい

る。例えば、有名な民族指導者たちの中には徹新（ギョンシン）学校の安昌浩（アン・チャンホ）、培材学堂の徐載弼（ソ・ジェピル）、李承晩（イ・スンマン）、崇實（スンシル）学校の崔光玉（チェ・グァンオク）、曹晩植（チョ・マンシク）、梨花學堂の柳寛順（ユ・クァンスン）などを排出し、延禧（ヨンヒ）専門学校などの高等教育機関は、民族の指導者が集まって教授として活躍した。その中には、鄭寅普（チョン・インポ）、崔鉉培（チェ・ヒョンベ）、趙炳玉（チョ・ビョンオク）などが有名である。

しかし、米国人宣教師たちの韓国での役割について、このような肯定的な影響に反してLee (2007: 29-46) は、①韓国に関する否定的イメージの形成と流布、②韓国人たちの劣等感惹起、③革命意識の抹殺と現実順応的思考の形成、④親米勢力の養成など否定的な面を挙げていたりもする。

4. 清教徒思想と韓国の余暇

余暇に対する清教徒たちの思想は否定的であった。清教徒たちは余暇に対しても、法を優先視したり硬直するようになった。日曜日に行うすべてのスポーツに反対し、道徳的に問題があるスポーツやカトリックと関係ある文化と芸術に対して否定的であり、余暇に対して功利的な態度を見せた。しかし、米国の宣教師たちは多様な近代体育・スポーツを韓国に導入したのである。

4.1 清教徒の余暇観

17世紀になると、清教徒たちは、教義的な面において宗教改革以前教会の安息日遵守主義に戻ってしまった。実は、清教徒たちの安息日遵守主義は以前の安息日遵守主義よりさらに厳格で、さらに決疑論的なのに、すぐにこのような立場が『ウェストミンスター信仰告白書』、『ウェストミンスター教理問答』、『ウェストミンスター礼拝模範』に明確に反映されている (Yang, 2000: 481)。

『ウェストミンスター小教理問答』には安息日について次のように記してあった。「安息日はどのように聖別しなければならないか。安息日は、

ほかの日なら正当であるこの世の業務や娯楽さえも、これをやめて、この日をまる一日、きよく休み、やむをえない働き、また慈善の働きに用いられるほかは、すべての時間を、公的なまたは、私的な神礼拝の行為に用いて、聖別しなければならない」(日本基督改革派教会信仰規準翻訳委員会訳、佐藤敏夫、1988: 140)。

清教徒たちにとって、一層強調されるのは、日曜日、すなわち安息日のストイックな性格である。日曜日には娯楽を反対し、礼拝と休息を主にすることを主張した。したがって、彼らには、安息日としての余暇はあったが娯楽としての余暇はなかった。祭りはあったが遊びはなかったと言える。Shepard (Kim 訳、1995: 73) によると、安息日の遵守には世俗的な競技と娯楽だけでなく、すべての肉体労働からの安息も含むといった。清教徒たちの安息日遵守主義は、教義的に律法への回帰であり、遊びは否定され、肉体労働から休息という余暇の意味を整えているというが、自由と選択という余暇の本質に照らしてみるならば、真の余暇だということは出来ないであろう。

清教徒たちの安息はやはり余暇の次元で成り立った。それは貪欲な衝動を制限することであった。事実、Ames (1968: 299) は、聖日に行く適切な活動と不適切な活動を区別して限界を置いたりした。不適切な活動は、自分自身の富と有益のためのものである。Bownde (1983: 39; Ryken, 1987: 105) は、世の中的なことで聖日が邪魔されることになるならば、神様の仕事は行なうことができなくなると話していた。

清教徒たちは、『合法的』である基準により余暇を追求しようとした。例えば、Perkins (1965: 114; Ryken, 1987: 106; Kim, 2012) は、余暇を判断するための四種類の宗教的で道徳的な原理を次の通り挙げている。(1) レクリエーションは、『最も良い評判』を受けなければならない。(2) レクリエーションは、『我ら自らと他の人に有益でなければならなくて、神様の光栄を現わすということではなければならない。』(3) レクリエーションの目的は、『私たちのからだを新しくすることではなければならない。』(4) レクリエーション

は、節制して時間を節約するべきで愛情がなければならぬ。このような基準はある程度合法的である面があるが、この基準の長所は、余暇を追求するところに宗教的な基準を適用するという点である。

さらに、清教徒たちは余暇それ自体を肯定した面もあると同時に、余暇が過度に追求されることができるとも知っていた。彼らはレクリエーションにかかる時間だけでなく、そこに消費されるお金も節制することを主張した。例えば、I. Mather (Wagner, 1982: 61) は、「キリスト教徒がレクリエーションをするのは非常に正当で、他の見方をすれば相当な義務でもある。しかし、いつもカードや賭博をする博徒たちのように、どんなレクリエーションにとっても多くの時間を浪費するのは卑劣に罪を犯すことだ。」と指摘し、C. Mather (Wagner, 1982: 61) も、「適当なレクリエーションは…より健全で有用したのだ。」と説教して警告した。

清教徒たちは余暇に対しても法を優先視した。すなわち、清教徒たちの余暇に対する態度において最も不満そうなのは、余暇活動に対する規則がとて多量ということである。例えば、キリスト教徒が余暇を持つ時、守らなければならない次のような18種類の条件を指定することもした。余暇は窮極的に神に仕えて『まかせた平凡なことで義務』を遂行するのに役に立たなければならない。娯楽が不敬で淫らではいけない。他の人に被害を与えてもならない。『怠惰が積もって運動に現れる場合』に運動は合法的でない。より良い余暇を選択できたにもかかわらず『適合しなくて有益でない』余暇を選択すれば、『それは…罪だ』。そのような条件にしばられた結果は、いくら理論的に『合法的』と言っても、余暇に対して疑わしい心を持つようにするはずだ。

また、清教徒たちは余暇に対して功利的な態度を見せた。前で調べたように、清教徒たちは原則的に余暇に対して反対しなかった。余暇に対する彼らの防御は、本質的に功利的なことであった。余暇は仕事を可能にさせるから良いことであった。それは余暇自体のために、または、生活

の祭りとして、または、人間の心を広げることで価値あるのではなかった。例をあげれば、ある清教徒は、「レクリエーションは、休息のためのものでなく労働のためのもので、人間は労働するのに、さらに適合することになるように余暇を利用した」と書いた。また、レクリエーションは、「ただし、私たちが労働を継続できるように助けること」と付け加えた (Ryken, 1987: 109-110; Kim, 2012)。

Ha (2007) によると、初期アメリカ大陸に定着した異民族たちの法典に、成文化されていたゲームと娯楽に対する内容を見れば、娯楽やスポーツ活動の参加は、想像もできない雰囲気であったことが明らかになる。17世紀、清教徒たちが移住した北部の植民地は、ただ禁欲と節制を徳性と考へて、清教徒主義に立った生活方式を維持した。感情を抑制してむやみに笑うこともせず、黒い服を着るのが好きだった清教徒たちは、新大陸に到着した後、遊戯やスポーツに対する敵対的な情緒をずっと露出していたので、娯楽やスポーツ文化が発達することはできない状況だったものとみられる。

清教徒主義の情緒は、1800年代後半まで残存し、スポーツ文化の発達に影響を与えたことは、新しい法令改正の事例を通じて明確に確認することができる。独立戦争以降、都市化が加速化され、新しい富とレジャー活動の増大を持ってきた。伝統的な安息日を守らない宗教家の数が増加し、関連法を犯す人々も日ごとに増加した。このような事態に驚いたペンシルバニア立法府は、1794年、法令を無秩序なスポーツと放蕩な生活を規制することに改正した。

しかし、1851年、米国Y.M.C.A.が結成されて良い兆しが現れた。清教徒の教理を守りながら、清教徒の観点から楽しみとゲームを改善するようにしとの要求が起きた。時代は変わっており、スポーツはすでに新しい姿で組織化され始め、清教徒の気風を維持した聖職者たちは、急速に発達するレジャーと娯楽文化に対して牽制を加えたが、第3の覚醒運動もスポーツ文化の成長と拡散を防げなかった。

4.2 清教徒思想が韓国の余暇に与えた影響

清教徒思想が韓国の余暇に与えた影響については、否定的な面と肯定的な面があり、否定的な面でもまず考えることができるのは、ストイックな安息日遵守主義が挙げられる。もちろん、これは教会やキリスト教系が中心なのだが、前で調べたような清教徒主義のストイックの安息日遵守主義は、英国から米国に伝えられて、また米国から韓国に伝えられた。

今日、米国でのその影響力はだいぶ減退したといえることができるが、ウェストミンスター信仰告白書・大教理問答・小教理問答・礼拝模範を、ほとんどありのまま自分たちの信仰と実践の遺産として受け継いだ韓国の長老教会が、新しい形態のスコラ哲学的な安息日遵守主義の清教徒的安息日遵守主義に深刻に影響を受けるようになったことは当然のことである。

その結果、Yang (2000: 485-486; Kim, 2009) は、韓国の長老教会がアイロニカルにも、自分たちの信仰と人生の絶対的標準になる聖書（特に新約聖書）や彼らが全教会史を通じて最も信頼するほどの神学者と認定するカルバンの安息日理解よりは、彼らの批判の対象として期待されるスコラ哲学的安息日遵守主義に、さらに近い安息日/聖日神学を発展させていくことになったと批判した。

現在の韓国で、最も大きなキリスト教教団の韓国キリスト教長老会の総会憲法中、『小教理問答』と『大教理問答』によれば、安息日（日曜日）は聖に休んで、娯楽は終わって、礼拝差し上げるのに捧げろと教えている (Kim, 2009)。

安息日を聖にすることは、その日、一日を聖に休むことですので、他の日に適する色々な世の中の事と娯楽まで終わって、その時間を公私間の礼拝に捧げて使うことで、その他にはやむを得ないことと慈善事業に使うことができる（小教理問答文60）。

安息日、あるいは聖日を聖にすることは、終日を聖に休むことで、いつも罪悪なことを終わるだけでなく、他の日に適する世の中の事や娯楽まで止めなければならないが、や

むを得ないことと慈善事業に使うのを除いては、その時間を公私間礼拝することを喜びとするであろう。その目的のために、私たちの心を準備することであり、世の中の事をあらかじめこまめに節制あるように配置して、適切に処理して、聖日の義務により一層自由に、または適当に行うべきであろう（大教理問答文117）。

もちろん、今日、教団の総会憲法に規定されている安息日遵守主義が、たくさん衰退していきつつあるが、牧師によってはまだ、清教徒的なストイックな安息日遵守主義、または、聖日遵守が強調されている場合も多い。

次に挙げられるのは、余暇の道徳的な定規をとっても厳格に適用して、余暇活動の幅を過度に制限したという点である。不敬ではなくて、猥褻的ではないという基準を厳格に適用する場合、余暇活動の相当部分を制限しなければならなくなる。何より最も大きな問題は、労働をとても重視したあまり、余暇をさげすんで正しく評価できなかったということである。さらに、「仕事をしたくなくれば食べることもするな」という話があるほどである。余暇は時間浪費と考え、レクリエーションを受け入れても、それは仕事を上手にするための方便で、余暇の効用性で評価することによって、余暇を労働の一部分に作ったのである。また、余暇を楽しむのに対して、どんな罪の意識を感じる傾向も出てきていた。

しかし、このような否定的な影響だけあるのではない。特に、学校体育をはじめとする社会体育および近代スポーツにおいては、輝かしい貢献がみられた。すなわち、Jun & Um (2000) によると、1980年代キリスト教の宣教師たちが韓国の地に宣教の種をまいた以後、1910年までのわずか30年余りという短い期間に、キリスト教が早く伝播し、開港を前後して台頭した開化派は、新しい西洋文化としてのキリスト教を積極的に受け入れて、韓国の開化を成し遂げようと思い、宣教師たちによる開化運動は、韓国の民族に反封建、開化意識などに目を開くようにしてくれた。

何より、宣教師たちによって設立されたキリスト教の学校は、全国的に広がって、韓国民族の思想的・精神的変革の拠点的役割を果たした。これに従来の体育に対する概念が、武芸を修練するための補助的手段と余暇を送る娯楽中心の身体活動であったため、特に、宣教師たちによって近代のスポーツが紹介されながら、学校だけでなく一般社会に拡大して、社会体育の決定的な契機もなった。

宣教師たちによって創立された皇城キリスト教青年会は、青年の体質を剛健にするという目標の下に組織された団体として、各種運動会を開催して徳育および知育と一緒に体育を通した全人的人間育成に力点を置いて、国家の情勢に照らして、体育活動を通した民族の団結が国権回復の道であることを悟るようになった。

宣教師たちは、バスケットボール、野球、スケートなど近代スポーツを韓国に初めて導入し普及して、スポーツの量的発展に貢献しただけでなく、体育専門家を養成して、スポーツの質的発展にも大きく貢献した。また、韓国の近代化と国権回復という趣旨の下に、韓国社会に近代的体育の普及と発展に中枢的な役割を果たした。

このような新しいスポーツの普及は、固有のスポーツに浸っていた国民に、多様で興味ある運動を通じて体力を育て、精神力の強化を持ってきて、人間の基本生活能力を向上させて、国の柱の健全な青年を育成すると同時に、体育の政策的普及と質的向上とともに、体育に対する一般国民の認識を高めるのに大きく寄与したといえる。

5. 要約および結論

旧韓末、門戸開放とともに入ってきた米国のキリスト教は、韓国に大きな変革を起こした。彼ら宣教師たちは、聖書に基づく自分たちの社会の建設を目指した清教徒たちとして、教育に対する熱意と学問に対する愛着を持ち、教会と社会が聖書によって治められなければならないと感じ、万人祭司の教義と神様の主権思想を所有していた。このような米国の清教徒思想が、韓国の近代教育と

余暇に与えた影響に対して、関連文献や資料などを通じて考察した結果は概して次の通りに要約することができる。

最初に、清教徒たちは教育を重要視した。すなわち、魂を救いに引き渡しできる信仰知識の手段だと考えた。清教徒の視覚から見れば、人間の仇敵は無知、特に神様の記録された御言葉に対する無知であった。彼らは、無知を聖徒に対するサタンの最も大きな攻撃手段だと見た。したがって、学校の設立は米国清教徒たちの象徴になり、清教徒の教育革新は米国の大衆教育制度の模範になった。

二番目、清教徒思想が韓国の近代教育に与えた影響を見れば、旧韓末、韓国は門戸開放で教育にも新教育に対する希望とともに、米国のキリスト教と宣教師たちを通じて、多少否定的な面もあったが、近代化を成し遂げるなど肯定的な面が多かった。特に、キリスト教系学校の設立は、キリスト教精神とともに、古い儒教的な旧習を改革し、韓国民族に自主・自立の精神を確立させ、立派な民族の指導者を排出した。

三番目、清教徒の余暇観は、教義的な面で安息日遵守主義とストイックな性格であり、日曜日にはすべてのスポーツを反対した。また、彼らは合法的な基準により余暇を追求しようとし、余暇に対しても法を優先視し、余暇に対して功利的な態度を見せるなど、概して否定的な姿が多かった。しかし、Y.M.C.Aの結成で良い兆しが現れることになった。

四番目、清教徒思想が韓国の余暇に及ぼした影響については、否定的な面と肯定的な面に分けられ、ストイックな安息日遵守主義や余暇も、仕事が上手にするために必要だという意識、また余暇を楽しむのに対して罪の意識を感じることなどは否定的な姿であった。しかし、学校体育をはじめとする社会体育および近代スポーツの導入と発展、体育活動を通した民族の団結などにおいては、肯定的に評価することができる。

参考文献

- Ames, W. (1968). *The Marrow of Theology*. Boston: Pilgrim
- Bae, H. G. (1983). 米国の清教徒思想が韓国の新教と近代教育に及ぼした影響 大邱教育大学校論文集
- Bownde, N. (1983). *The Doctrine of the Sabbath*. Lanthan, N. Y.: University Press of America.
- Choi, U. S. (訳) (1991). 世界教会史 ソウル: 總神大学出版部
- Child, B. S. (1976). *The Book of Exodus: A Critical Theological Commentary*. Philadelphia: The Westminster Press
- Dawn, M. J. (1989). *Keeping the Sabbath Wholly*. Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
- Fisher, J. E. (1970). *Democracy and Mission Education in Korea*. Reprinted by Yonse University Press.
- Ha, N. G. (2007). 米国スポーツ社会史: 清教徒主義とスポーツ 韓国体育史学会誌, **19**, 1-24.
- Hall, D. (1989). *Worlds of Wonder, Days of Judgment Popular Religious Belief in Early New England*, Cambridge, Massachusetts Harvard University Press.
- Han, G. U. (1973). 韓国教育史 ソウル: 博英社
- Jang, D. S. (2003). 韓国教育史 ソウル: ドンムンサ
- Jun, M. H. & Um, J. S. (2000). 宣教師たちが近代体育活動に及ぼした影響 韓国体育史学会誌, **39** (3), 42-52.
- Jung, J. S. (2006). 清教徒たちの教育思想研究 神学指南, **73** (4), 94-124.
- Kim, S. H. (訳) (1995). 清教徒礼拝 ソウル: 基督教文書宣教会
- Kim, S. W. (訳) (2003). 清教徒: この世の聖者たち ソウル: 生命の御言葉社
- Kim, S.H. (1999). 米国社会文化形成に現れた清教徒の影響 天安大学校国際大学院美国学科修士学位論文
- Kim, O. T. (2009). 安息日に関する概念の時代的移り変わりによる余暇の意味 国際基督教大学学報 1-A, 教育研究, **51**, 11-21.
- Kim, O. T. (2012). 余暇に関するキリスト教的一考察—聖書とピューリタンを中心に— 国際基督教大学学報 1-A, 教育研究, **54**, 41-52.
- Lee, G. S. (2007). 20世紀韓国教育史 坡州: 集文堂
- Lee, M. G. (1949). 朝鮮教育史下 ソウル: 乙酉文化社
- Lee, M. Y. (1981). 韓国基督教와 史意識 ソウル: 知識産業社
- Michael, M. (1970). American Puritan Studies in the 1960's. *William & Mary Quaterly*
- Oh, C. S. (1964). 韓国新教育史 ソウル: 現代教育叢書出版社
- 大木英夫 (1966). ピューリタニズム倫理思想 新教出版社
- 大下上一 (編) (1969). ピューリタニズムとアメリカ 講座アメリカの文化 I 南雲堂
- Park, Y. H. (訳) (1994). 清教徒精神 ソウル: 基督教文書宣教会

- Perry, M. (1954). *The New England Mind: The Seventeenth Century*, Harvard University Press.
- Ryken, L. (1987). *Work and Leisure in Christian Perspective*. Inter-Varsity Press.
- 佐藤敏夫 (訳) (1968). 日本人キリスト者とアメリカ人宣教師 日本における近代化の問題 岩波書店
- 佐藤敏夫 (1988). レジャーの神学 新教出版社
- Shepard, T. (1641). *Works*, ed John Albro, Boston.
- Son, I. S. (1989). 韓国教育思想史Ⅴ ソウル: 文音社
- Son, I. S. (1998). 韓国教育史研究 (下) ソウル: 文音社
- Van Dallen, Deobold, B., & Bennett, B. L. (1971). *A World History of Physical Education*, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc.
- Won, Y. H. (1974). 韓国史大系 (7), 朝鮮末期 ソウル: 三珍社
- Yang, Y. U. (2000). イエスと安息日そして聖日 ソウル: イレ書院

注

1. 老会は、キリスト教の長老教で、各教区の牧師と長老代表が集まる集い。
2. 両班 (ヤンバン) は、朝鮮時代の支配層。